

父の「戒名」

窪島 誠一郎

昨年九月八日、父水上勉が亡くなった。享年八十五歳。十数年前に心筋梗塞でたおれ、その後二どにわたって脳梗塞にもおそわれ、ここ何年かは車椅子での生活を余儀なくされていたほどだったから、早晩この日がくるのは覚悟していたのだが、やはり亡くなってみるとその喪失感は大だしい。私にとっては、戦時中に生き別れしていて戦後三十余年ぶりにめぐりあった「奇縁の父」でもあったので、よけいその寂寥の思いはふかいのである。

父が亡くなって、さっそく問題になったのが「戒名」(法名ともいうらしいが)であった。何しろ生前、幼少期の仏門体験をモトに多くの仏教批判、僧侶批判の本を書いた人だったし、戒名や葬式のありかたについても一家言、二家言もついていた作家だったから、当人の「戒名」ともなればハテどうしたものかと、思案するのは当然なのである。

ただ、幸いだったのは、水上夫人である観子さんの生家が、大分県の禅宗のお寺であったことで、父の容態がかんばしくなくなった昨夏の初め

頃から、その住職さんが「戒名」については色々検討されていたそうなのであった。何でも最初は、二、三の家を父本人に提示して、そのなかから自選してもらおうということになつていたのである。ところが、そのうちに父が急激に衰えてしまつて、生前に相談する機会を逸してしまい、けっきょく密葬のときの位牌に記されたのは、住職が一番気に入つていたのである。

——影竹菴掃階清勉居士。

この「戒名」の典故となつたのは、中国の詩偈「竹葉掃階塵不動、月穿潭底水無痕」からだそうである。素人訳すれば「竹葉の影がうつる階段を箒で掃いても塵は動かず、月が滝ツボをつらぬいても水底には何の痕もな」といった意味になるのだろうか。院号ではなく菴号をえらんだのは、院号のほうだと宗派の決まりがあつて余分な費用がかかるからだそうである。また「庵」ではなく「菴」にしたのは、かの鈴木大拙翁の「戒名」世風流菴大

拙居士」を参考にしたためだということであつた。あとからきいたところでは、この戒名の他にもう一つ

——影竹菴釋掃階清勉。

というの候補にあがったそうなのだが、「釋」が入ると真宗的になり、「居士」がつけば禅宗的になるということ、最終的には「釋」を取つて「掃」のかわりに「掃」にしようということになつたらしいのである。この方面にくわしくない私などは、なるほど生前から竹を愛し竹に関する数々の著作をのこした父を思い出し、また京都相国寺に奉公していた頃は、一日中寺内の掃きそうじに明け暮れていたという父の修行時代をふりかえつて、この「戒名」はなかなか苦勞人の父に似合つたいい法名だなと感心したものだった。

しかし、つい先日、久しぶりに当浄運寺のご住職小林覚雄さんと長野市内で一献かたむけたとき、私が何気なく父の戒名を披露すると

「いい戒名ですが、どこにも文学の文が入っていないのがちょっとさみしいですね」

住職が控え目にそういわれたので私はハツとした。

たしかにいわれてみればその通り

で、「影竹菴掃階清勉居士」には、寺の庭そうじする奉公時代の父の姿は思ひつかんでも、後年文壇の頂にのぼりつめ多大な文業をのこした文学精進の半生はどこにも語られていない。くだんの「戒名」を眼にしたとき、いい戒名だなとは思いつつも、そこに何とない物足りなさをかんじたのはどうやらそのせいだったらしいのである。やっぱり専門家の意見はできるだけ広くきいてみるものだなと思つた。

で、現在小林住職には、わが父水上勉の「戒名」の改訂版を考へてもらつておられるというので、この稿で中間報告なのだが、今のところ住職の頭の中には「文」と「耕」という二つの文字があるらしい。「文」を文学の文と解すれば、「耕」はその土壤を耕しつづけた父の生涯を象徴する文字。「耕文」を「影竹菴掃階清勉居士」のなかのどこに置くかで、この「戒名」の生き死にが決定するといふのが住職の考へなのである。なるほど、なるほど。

小林覚雄住職の熟慮黙考によつて新しい「戒名」が誕生したら、私はあらためて眷族一同の同意を得て、せめて自分の抱く父の位牌にだけでも、その名をきざみみたいと夢みているところなのだ。

(「信濃デッサン館」無言館「館主」)